

1 研究主題

古枝小学校の「主体的・対話的で深い学び」の実現（2年次）
～教科グループにおける授業実践を通して～

2 主題設定の理由

令和元年がスタートし、子どもたちの環境はますます劇的な変化を遂げることが予想される。年ごとに情報が多様化し氾濫していく社会の中では、深い思考力と正しい判断力でより良い情報を選択することが、社会の中でより良く生活する力につながる。そのためには、他者と情報交換しながら、正しいと思う考えを導き出す力が必要となる。そこで、「主体的・対話的で深い学び」を日常の授業の中で具現化していくことをねらいとして、本研究主題を設定した。

(1) 学習指導要領の考え方

現行学習指導要領では、知識基盤社会の中、ますます重要になる「生きる力」をバランス良く育てていくことが意図された。特に学力については、「基礎的な知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」という学力の三要素をバランスよく育成することが重視されることとなった。これまで育成を目指してきた「生きる力」を改めて見直し、2030年頃の社会の在り方を見据えながら、子どもたちがその社会の中で活躍する姿を考えていくことが重要とされている。

これから、人工知能の進化やさらなるインターネットの普及などによって、社会の変化がさらに加速され、複雑で予測困難な時代になっていく。その中で、自分たちの社会や人生をより良いものにしていくために、様々な問題・課題に対して主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を最大限に発揮できる力と習慣が必要になる。

(2) 昨年度までの研究実践から

昨年度は、それぞれの教科グループ・特別支援教育に分かれて研究を進めた。その成果としては、児童が学習課題に対して意欲的に「めあて」と「見通し」を持つことで、主体的な活動が実現できたことである。そして、このことはどの教科でも共通して言えることであることがわかった。また、主体的に学ぶ児童を育成していくためには、授業における「しかけ」が必要であることがわかった。それは教師の「発問」であり「場の設定」であり様々なものが考えられる。その効果的な「しかけ」により、児童の主体的な活動が実現できた。

また、「振り返り」については評価の観点を明確にすることや、自分の学習を継続的に振り返ること、あるいは感想にとどめるなど、様々な提案がなされたが、はっきりとした道筋は立っていない。

そこで今年度は、「しかけ」を含めた教師の役割（出番）を各教科の学習過程の中でどのように組み込んでいくのか、「振り返り」の効果的な在り方を主な課題として研究を進めていきたい。

3 研究主題の考え方

「主体的・対話的で深い学び」とは ～本校のとらえ方～

(1) 「主体的な学び」

- ア 問題をみつけ、自分のめあてをもつ。
- イ 問題の解決のため、見通しをもち、学習計画を立てる。
- ウ めあてに向かって、今もっている力を存分に発揮して実践する。
- エ 活動を振り返り、次への展望をもつ。

(2) 「対話的な学び」

- ア 試行錯誤しながら学習に取り組む（自己内対話）。
- イ 自分の言葉で説明したり、友だちの話を真剣に聞いたりする。

(3) 「深い学び」

- ア 学習を実生活に生かす。
- イ 新たな考えに気づく。
- ウ 自己の成長が実感できる。
- エ 思考や態度が変わる。

4 研究のねらい

教師の役割を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」を日常の授業で具現化する。

5 研究の内容と方法

(1) 授業づくり

ア 教科グループで『めざす子どもの姿』について明確にする。

- ① 教科でつきたい力
- ② 低・中・高でつきたい力
- ③ 単元でつきたい力
 - ・ 低・中・高で「めざしたい子どもの学び」（一覧表参照）を参考にする。
 - ・ 児童の変容をみるためのアンケートを全学年で行う。
- ④ 研究会での視点
 - ・ 教科の「めざす子どもの姿」は明確に表れていたか。
 - ・ 主体的な活動を実現するための教師の「しかけ」はどうだったか。
 - ・ 振り返りは次の主体的な活動につながる効果的なものであったか。

イ 環境づくり

- ① 物的環境
 - ・ 掲示物などの校内・室内環境づくり
- ② 生活環境
 - ・ 互いに学び合う学級集団づくり
 - ・ 基本的な学習習慣や学習態度の定着と家庭学習の充実
 - ・ 子ども一人一人に対する児童理解
 - ・ 学力検査の結果から落ち込みがあるところの補充指導

(2) 教師の役割の明確化

ア 教師の発問

- 子どもの興味・関心を高める。

イ めあての持たせ方

- 子どもの「やってみよう」という意欲を喚起する。

ウ 場の設定・工夫

- 子どもの自力解決を援助する。

エ 振り返りのさせ方

- 次の学習への意欲を高める。

オ 教師の指導・支援

<指導・支援の場面>

指導場面	指導・支援の内容	評価との関連
単元計画の立案	○子どもの実態や興味、関心、意欲などを捉え単元の設定	◇診断的評価 ・子どもの見とり
単元の実施	○子どもの、主体的な学習活動を引き出し、高めるための関わり ○自力解決を促し、その力を高めるための関わり	◇形成的評価 ・毎時のめあての達成状況の把握 ・つまずきの発見と、その解決の見通しができているかの把握
単元のまとめ	○単元のめあてがどの程度達成されたかを振り返らせる関わり ○楽しく学習できたのかを振り返らせる関わり	◇総括的評価 ・単元のめあての達成状況の把握 ・楽しさ、満足感の状況の把握 ・次時への見通しがもてているかの把握

<単元の実施段階の指導>

子どもの学習活動に停滞などの問題が生じていないかを観察する。問題があれば、指導を行い、問題が解決されたかを再度観察する。

問題の発見	原因の追及	指導の具体化
主体的な活動ができていますか	<ul style="list-style-type: none"> ○めあてがもっているか。 ○見通しがもっているか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 課題の発見 ・ 学習内容や方法の理解 ・ 時間計画など ○実施上の問題はないか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 解決方法が適切か。 ・ 学習の仕方や進め方が分かっているか。 ・ 協力的な学習ができていますか。 ○評価に問題はないか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ めあてに対して評価しているか。 ・ つまずきを発見しているか。 ・ 振り返りをもとにフィードバックしているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇原因に対応した指導を具体化する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 助言、示唆 ・ 資料提示、情報提供 ・ 他の子どもによる示範 ◇自力解決の余地を残した指導を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 個に応じた対応 ◇学級経営全般での継続的な指導も見据える。
みんなが楽しく学習しているかどうか	<ul style="list-style-type: none"> ○人間関係や学習マナーに問題はないか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業中解決できる問題 ・ 授業中では解決が困難な問題 	

(3) 授業の立案、実践

ア 主体的な学びを引き出す工夫

以下は、これまでの研究の中で明らかになったことである。今年度は、低・中・高学年ごとの「めざしたい子どもの学び」の姿と現在の子どもの姿と照らし合わせて、授業実践に使うことができるようにしていく。

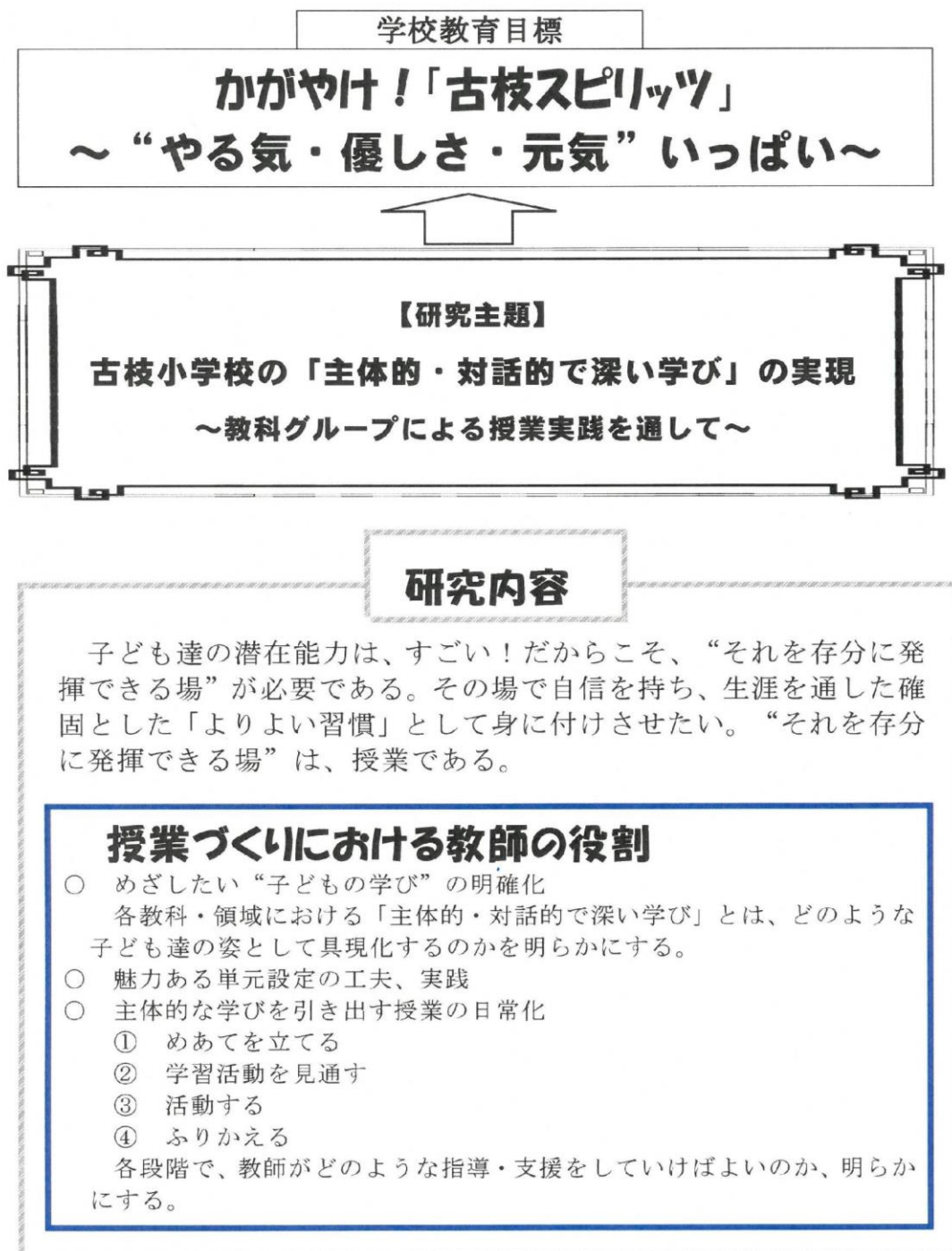
	指導の工夫	指導・支援の内容
めあて	問題をみつけ、自分のめあてをもたせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 解決する価値と魅力ある問題を提示する。 ・ 問題そのものに対する知的好奇心、興味・関心、疑問、必要感、切実感をもたせる。(外発的動機付けではなく内発的動機付けが大切) ・ 自分の姿を客観的にとらえさせることで、めあてをつかませる→「つまずき」を「めあて」に生かす。 ・ 子どもと学習内容との関係を大切に考える。 ・ 子ども目、教師目を肥やす。 ・ 前時の振り返りをめあてにつなげるようにさせ、思考の連続性を生み出す。
見通し・計画	問題の解決のため、見通しをもち、学習計画を立てさせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習の学習内容、学習方法の振り返りをさせる。 ・ 学習方法や解決のための具体的な支援策を示す。(どの方法で学習するのは児童に選択させる) ・ 「自分たちで計画を立て学習する」という経験を繰り返させる。 ・ 活動計画表を自分たちで作成させる。 ・ 学習の流れをシンプルにし、パターン化させる。
実践	見通しや計画に沿って、今もっている力を十分に発揮して活動させるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが安心できる場、支持的風土づくりをする。 ・ 試行錯誤の場を設定する。 ・ 互いに学び合う場を設定する。 ・ 友達(相手)が何をめあてに、どのような方法で学習しているのかを、互いに理解し合おうとさせる。 ・ 子どもの実態より活動時間、活動内容、活動形態を工夫する。 ・ 子どもをよく観察、理解し、適切な指導をする。 ・ 教師の思いは大事だが子どもが満足できるように仕組む。 ・ 活動時間を保障する。 ・ 子どもの実態に応じて、少人数、習熟別、課題別など学習形態を工夫したり、TTなど指導形態を変えたりする。

振 り 返 り	活動を振り返り、次への展望をもたせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返りの視点を提示する。(感想、分かったこと、友達のよさ、困ったこと、次したいことなど) ・ 内容面、方法面からの振り返りをさせる。 ・ 次時へのつながりを意識化させる。 ・ 時間を確保する。 ・ 日記を活用させる。 ・ 失敗の理由(解決方法や時間、解決のための努力に問題があるのか、めあてが自分にあっていないのか)を考えさせ、めあてや学習計画の見直しをさせる。
------------------	-------------------------	---

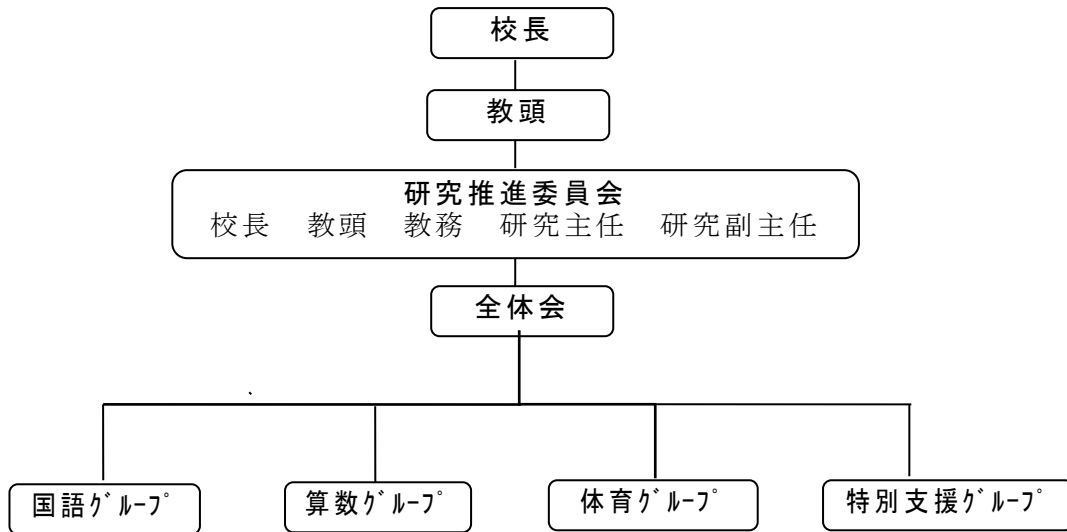
イ 授業の実践、検証

- ① 国語、算数、体育の3教科と特別支援の立場から授業研究を行う。
- ② 全体研……3回

6 研究の全体構想図



7 研究の組織



8 研究の計画

月	日	内 容
4月	8日 月	全体構想（研究主題、目標、内容、研究組織、研究計画）
5月	8日 水	教科グループ研修（計画）
	15日 水	教科グループ研修（めざす子どもの学び）
6月	5日 水	全体研修
7月	3日 水	第1回全体授業研究会 講師招聘
	17日 水	全体研修（振り返り、実践交流）
8月	上旬	教科グループ研修
	下旬	全体研修（実践交流）
9月	4日 水	教科グループ研修
	11日 水	第2回全体授業研究会 講師招聘
10月	2日 水	教科グループ研修
	9日 水	第3回全体授業研究会 講師招聘
	16日 水	教科グループ研修
11月	7日 水	第4回全体授業研究会 講師招聘
1月	15日 水	教科グループ研修
	22日 水	第5回全体授業研究会 講師招聘
2月	5日 水	第6回全体授業研究会 講師招聘
3月	4日 水	今年度のまとめ、次年度の研究の方向性について